―ものづくり・商い・もてなしのまち京都―

⑴　伝統産業を支える地域

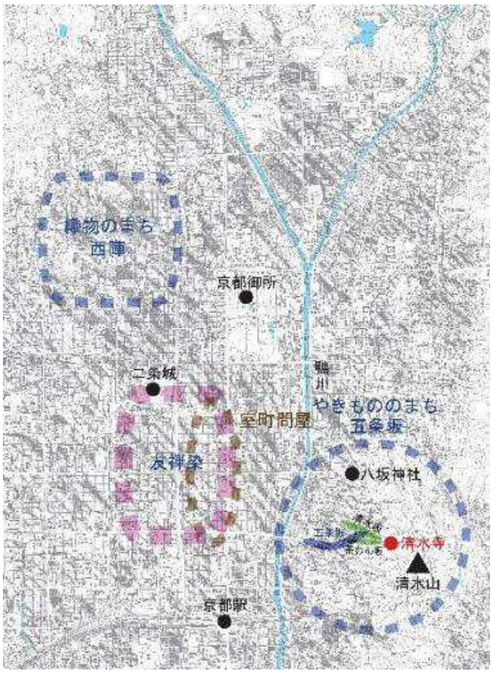

図2-35　伝統産業を支える地域

京都の産業は，日本の政治・経済・文化の中心地として栄え，情報や物資が交流する中で，町衆が自由に活動することにより生まれ，京都の四季の移ろい豊かで風光明媚な自然環境の中で培ってきた美意識によって育まれてきた。

今日，そのうちの多くは伝統産業として受け継がれている。また，伝統産業による製品のうち１７品目は，伝統的工芸品として国の指定を受けたものであり，その数は全国で一番多い。京都は，多くの伝統工芸品を作り出す力が集積することによって，更に新しい伝統工芸品を生み出す力を持つ都市といえる。

また，伝統産業からスタートして，そのコア技術や培われた美意識を活用して先端産業に生まれ変わり，時代の先端を走る企業の出現にも枚挙にいとまがない。こうした先端産業は，直接，海外とビジネス展開を行い，京都から本社を東京に移すことがない。これは大阪生まれの大企業の行動パターンとは大きく異なる。

この項では，今なお発展を続けている京都の伝統産業の原点であり基盤であり，発展の支えとなっている地域の歴史的風致を示していく。

ア　具体事例

㋐　五条坂・やきもののまち

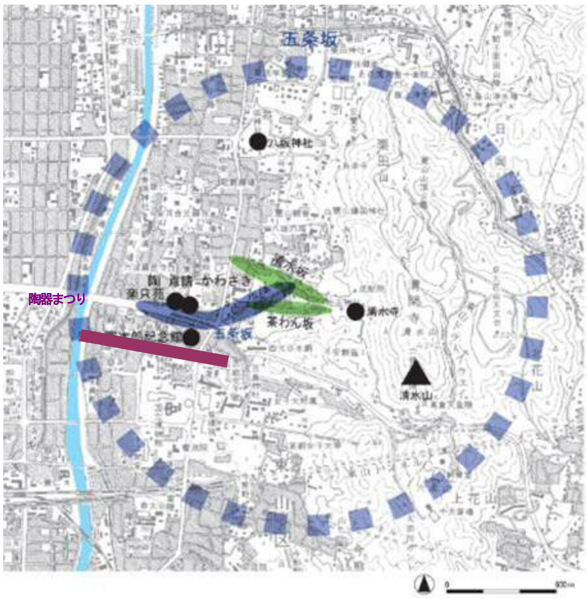

図2-36　五条坂・やきもののまち

現在五条坂というと，東大路から清水(きよみず)坂へ至る部分の名称としてよく使用されるが，かつては，現在の五条通の大和大路から清水坂との交差点あたりを示していた。清水寺から現在の東大路通に下っていく通りが清水坂と呼ばれ，清水坂から分かれ，五条通へと下っていく通りは五条坂と呼ばれ，いずれも清水寺参詣道であった。清水寺への参詣客が，五条坂や五条坂に平行した形で清水寺に続く茶わん坂に軒を連ねた京焼・清水焼の店舗は，この町の清水焼の歴史をしのばせる。

五条坂，茶わん坂はともに清水山の西側の麓に位置し，清水寺から東山五条に至るまでは急な傾斜地となっている。また，東山五条から五条通沿い，五条大橋に至る間は緩い傾斜を持っている。清水焼の登り窯は，これらの傾斜を利用してつくられている。現在，五条坂地区には，いくつかの登り窯が現存している。このうち，河井寛次郎(かんじろう)記念館（旧河井寛次郎邸）登り窯（国登録有形文化財）や旧藤平(ふじひら)陶芸登り窯などは，保存が図られている。

清水焼は慶長年間(１５９６～１６１５)の開窯(かいよう)とされ，江戸時代中期には五条坂もまた，清水焼の生産地となっていたとされている。尾形乾山(１６６３～１７４３)が記した「陶工必用」